


 書評

エドナ・B・フォア, テレンス・M・キーン, マシュー・J・フリードマン 編, 飛鳥井望, 西園文, 石井朝子 訳

PTSD 治療ガイドライン

エビデンスに基づいた治療戦略

中川誠秀

本書は国際トラウマティック・ストレス学会理事会が設置した「PTSD(外傷後ストレス障害)治療ガイドライン特別作業班」により作成されたものである。その領域のエキスパートにより作業班が組織され、PTSD の治療方法が9種に大別され(心理的デブリーフィング, 認知行動療法, 薬物療法, 児童思春期の治療, 眼球運動による脱感作と再処理法, 集団療法, 力動的精神療法, 夫婦療法と家族療法, 芸術療法), さらに, おのおのの項目に関し, 第I部では網羅的文献レビューによる治療へのアプローチ, 第II部では治療ガイドラインとして構成され, 詳述されている。そのため, 多忙な臨床家が治療の全体像を鳥瞰する際に大いに役立つ。PTSDとは, 今や衆知の用語となった。PTSDに関連する学術的研究は, Medlineで検索するとReviewでも1,424例, 総計9,509例(2005年6月20日)と多数検索され, 世界的・時事的なテーマであることがわかる。

本邦でも, 破壊的・ショッキングな事件として, 阪神・淡路大震災, オウム地下鉄サリン事件, 新潟県中越地震と印象に新しく, さらにDV(Domestic Violence), その他の犯罪(ストーカー, 性的犯罪など)被害者への精神的ケアに対する社会的な要請を背景に, 2002年3月に日本トラウマティック・ストレス学会が設立された。本書の訳者はその学会の重鎮であり, PTSD研究で著名な飛鳥井望氏を初めとした, 東京都精神医学研究所のメンバーである。

PTSDの治療は容易でないことが多く, たいの精神科医療従事者は治療を引き受ける

ことに逡巡してしまう。本書は, そのような臨床家に対して十分な配慮がされており, 米国健康政策庁(Agency for Health Care Policy and Research)のエビデンスレベル分類を採用し, 各治療法においてAからFまでの6段階のエビデンス強度を示している。たとえば, 最近注目を浴び日本でも専門学会が存在するEMDR(Eye Movement Desensitization and Reprocessing; 眼球運動による脱感作と再処理)は, エビデンス強度A/Bとなっている。換言すると, 「エビデンスは, PTSD患者を対象とした質の高い無作為比較試験もしくは質の高い臨床試験に基づいている」という評価となり, 現時点で, どの治療方法がどれくらいの信憑性があるのかわかる。

「PTSD患者の非常に重要な関心事は信頼である」「セラピストは信頼にたる者であること」と, 治療技法を説明し尽くした後に, 精神医療ケアの基本にも最後に言及している。飛鳥井氏らもあとがきで, 「本書の最終章では, 臨床家は科学的なエビデンスと臨床的叡知のバランスをとらねばならないことが強調されている。本書に記された治療ガイドラインが日本の臨床家にこの精神を伝え, 教条的あるいは独善的治療観から解放される一助となることを祈る次第である」と述べている通り, 本書はまさに偏りのない正統的治療ガイドラインといえる。

(神経研究所付属晴和病院)

●A5判 320頁 2005 定価4,725円(本体4,500円+税) 金剛出版